

文楽座の師走興行＜摘録＞

＜出典：「浪花名物浄瑠璃雑誌」昭和6年1月＞

一年中休みなしで押通した文楽の師走興行は前が碁太平記白石噺浅草雷門より新吉原揚屋まで。中が奥州安達原敷妙使者から袖萩祭文まで。次は恋娘昔八丈白木屋と鈴ヶ森。切は東海道膝栗毛赤坂並木の段までを撰んで居る。此の排列に関しては相当異論を唱える余地もあろうが、それは必ずしも今回に限らない是非を言えば毎興行に必ずある筆者もいたい方の質であるが会社がやると言い出したら遣り抜くのだから暫く差控える事にした。何となれば損益関係の全責任をもてる会社の意思であるから減多に容喙は出来ないと思う……。されども方針は方針として批評は別に考えねばなるまい。

△白石噺浅草雷門の段

手品師 豆造事 どじょう

	豊竹島 太夫	吉田 玉幸
勘 九 郎	竹本長尾太夫	吉田扇太郎
宗 六	竹本浪花太夫	吉田 玉松
	竹本文 太夫	
お の ぶ	竹本長子太夫	桐竹紋十郎
亭 主	豊竹辰 太夫	吉田 利勇
	竹本播路太夫	
	野沢 歌 助	
	鶴沢芳 之 助	

島太夫のどじょうは手品師にならない偕島太夫という名は紋下格というてもよい名前であるが、其の立派な名前主が手品師にならぬとはどういう訳か。島君の声柄として技工として是れ位の事は何でもあるまいと思うに、只だ島太夫が語って居るのみだ。豆造という手品師の癖を語らねば手品師は頭われない、幸に人形が居るから耳で聞くよりも眼で見る強い印象のお影で済むものの素浄瑠璃なら、手品師に聞えない勘九郎は遣しっかり語って居る。おのぶから拝まれては聊か心恥しい気もしたと見える、併し中興の名人長門太夫となるべき筋に居る長尾君緊禪一番せねばならぬ時だ。宗六は文太夫を聞いたが緊縮せずに五十両出した所は流石親方だ。長子のおのぶ国訛りはよいが語り過ぎるとでもいうのか如何にも田舎娘なりと請取り難い点がある。茶店の亭主は辰太夫の番であったが別段これと云う程の事もなく。糸は歌助を聞いたが芳之助の評判は非常によろしい

△新吉原揚屋の段

切	竹本鋳太夫	豊沢新左衛門
	傾城宮城野	吉田文五郎
	禿 しげり	吉田文二郎
	女郎 宮 里	吉田 市 松

女郎 宮 柴 吉田 文 作  
 妹 おのぶ 桐竹紋十郎  
 大黒屋宗六 吉田 玉 松

鑊さんは近頃大変気をつけて語る様になった。が動もすると写実に流れて品位を損う事がある。仮令奥州の山奥から出て来た娘でも芸術の上には美の感念は離されない訛りだらけのおかしな言葉を美化するが太夫の力であるから此の点は上手下手に拘わらない常に其の心掛けが大事と思う。「続くは末の松山を袖に浪越す涙也」の如きも清原元輔の歌より取りたるものなれば其の心が必要。又「立わけの暖簾」もたてわくの暖簾は吉原の廓を代表するものであるから、単に間の隔てに用ゆる意味ではないたてわくの模様を染出したる暖簾が涙に濡れた意味でなくてはならぬと思うと某物識りから聞いた事を記憶して居る「あつた故ぢや」もさかめいの方が轡の宗六の前身を物語るに適當の語と思わる。これは今一步を進めて研究調査を遂げて貰いたい。新左衛門師の糸は此美しい場面、涙を絞る情緒を現す事に於て天下一品。鑊太夫は之れにぶっ突って此の麗しき場면을語り出す工夫をせねばなるまい。現今斯麼ものを語るに鑊さん以外に誰れがある斯道凋落の折柄大に奮起し頽勢挽回に努力して貰いたい。至囑至囑。此の場の舞台装置は電気を巧に應用して屋外の夜色暗々たる処と室内の明晃々たる対照で頗る結構だが矢張り斯うした情景は太夫と三味線の力に任せて置く方がすき者にはよいと思う、けれども一般大衆にはアノ方が好評らしい、兎に角吉原情緒の漂う四段目の大芸術としての攻究を望む。因にこれは太夫の罪でも三味線の誤りでもない、本屋の錯誤から広く一般を誤らして居ると思うから一寸書添えて置く「光陰惜しむべき時、人を待ざることわり」は光陰惜しむべし、時人を待ざることわりでないと文体を成さぬからこれも攻究資料の一端として提供する。

△中狂言奥州安達原

敷妙使者の段

中 竹本桐生太夫 豊澤 猿 糸

矢の根の段

次 竹本大隅太夫 鶴澤 道 八

袖萩祭文の段

切 豊竹古靱太夫 鶴澤 清 六

敷 妙 御 前 吉田 扇太郎

謙 杖 直 方 吉田 玉次郎

妻 浜 夕 吉田 小兵吉

外ヶ濱南兵衛 吉田 玉 松

実は安倍宗任

桂 中 納 言 吉田 栄 三

実は安倍宗任

娘 袖 萩 吉田 文五郎

お き み 桐 竹 紋 司  
八 幡 太 郎 吉 田 光 之 助  
仕 丁 大 ぜ い  
腰 元 大 ぜ い

「心の内こそ哀れなれ」のソナへは無事以下達者に前へ出て居る母と娘は立行く迄、相生太夫としてはこれで結構だろうが苟くも三代目綾瀬太夫を継ぐべき人であるから満足を表す訳に行かない、筆者は涙を揮って技芸に精進せん事を勧告する。人情を語るに四声

（平上去入）五音（宮商角徽羽）を使う事に熟達して居ないと強弱表裏緩急が顕れない、素人は声と音を混同して居るから拙い事を演じて居るも太夫は決して左様には行かない必ず声と音の区別をたて以て人形を活躍させ、語り進むに随って益々声量音力を発揮せねばならない。発憤を促す次第である。大隅の矢の根は荷が軽い。無事に演ったが色々と虐められたお蔭で楽々となす。苦勞はせねばならないものと痛感したが、大隅はどうしても三段目でないと実力が出ない責任が重くても擔う丈けの力量がある以上は三段目の持役決して不当でない無理でない信ず。古鞆の祭文は実に皮肉を極めた語り方で満場涙に湿った、浜夕の情何とも言えず「延び上り」も「風につれ折柄頻りに降る雪に」「芦垣や」

「泣く声も」穩当よろし、この雪降りは悲愴目もあてられぬ感あり「見返り見返り」情調は古鞆太夫の独占せる皮肉場、以下段末までサッサとはかす面白さ勇ましき、序破急の法則に適える近来の珍品である。（以下略）